

ロビンソン・クルーソーを探して

探検家・作家 高橋大輔



答えは旅の中にある。

探検とは何かと問われると、真っ先にこの言葉を思い起こす。探検は地球を舞台とした謎解きだと思う。

二〇〇五年二月三日。わたしは南米チリの沖合、南太平洋に浮かぶ小さな孤島にいた。約一ヶ月、考古学者たちとともに進めてきた発掘調査は最終段階を迎えていた。すでに地面を二メートル以上も空しく掘り進めたわれわれには疲労の色が濃かった。

ロビンソン・クルーソー島。その名の通りそこは名作『ロビンソン漂流記』のモデルとなったスコットランドの船乗り、アレクサンダー・セルカークが無人島生活を送った島。彼は島のどこかに自力で小屋を建て、一七〇四年から九年までの四年四ヶ月間、一人きりで生き延びた。

そのサバイバル生活とは？ 小説の中では首尾よく困難を克服していくロビンソンだが、現実はどうだったのか？ 初めはそれらに想像力を膨らませるだけだったが、やがてセルカークが建てた小屋が未発見のまままだということを知るとじっとしていられなかった。それを探し出せば、セルカークが孤島でどうやって生き延びたのかがわかるのだ。しかもそれは実在したロビンソン・クルーソーの家なのだ！

セルカークの故郷スコットランドから南米のチリまで、旅は世界各地に及んだ。島にも何度か足を運んだ。三度目のとき、地元で暮らす漁師から山奥にある石積み遺跡のことを聞きつけた。その人は財宝が隠されていると信じていたので、誰にも正確な位置を教えたがらなかった。しかしわたしは何とか彼の信頼を勝ち得て、秘密の場所へ連れて行ってもらった。

二〇〇五年米国のナショナル・ジオグラフィック

ク協会から支援を得て、遺跡の発掘調査をスタート。掘り起こした土を少しずつふるいにかける地道な作業。期待に反して出てくるのは屋根瓦やレンガなど。すぐに石積み遺跡はセルカークのものではないことが判明した。

しかしわたしは諦め切れなかった。気がつけば十三年の歳月。その間、図書館で調べた膨大な古地図や文献、あるいは自分自身でもロビンソンになりきってテント生活をした。その結果、セルカークが小屋を建てたのは遺跡があるその場所以外にないという確信があった。

そこで考古学者のアドヴァイスをもとに、石積み遺跡からさらに下へと地面を掘り進めてみることにした。しかしやはり何も出てこない。諦めかけたちょうどその時、地面の色が黒く変わり始めた。注意深く調べるとそれは木炭。焚き火の跡だ。近くには掘って立てた小屋の柱を打ち立てた穴跡も数ヶ所見つかった。

さらに驚くべきことに同じ場所から航海道具の一つ、ディバイダ（割りコンパス）の折れた針先が出土。結局、ふるいにかかったそのわずかに十六ミリメートルの微細なピン先が決め手となり、そこがセルカークの住居跡だと判明した。航海士のセルカークは航海道具を持っていたという記録も残っていた。われわれはついにロビンソン・クルーソーの家を突き止めることができたのだ。それは忘れ難き興奮と感動の瞬間。

もちろん振り返れば諦めそうになったり、くじけそうになったりしたこともあった。しかし頼れるものは自分自身。そして同じ夢を追いかける仲間との信頼や友情。日本ばかりか世界の果てまで行っても、大切なことは変わらない。

そして答えはいつも旅の中にある。旅に出た者だけが、それを手にすることができるのだ。